

第一セッション「南北首脳会談の解剖」

(一) 韓国の視点から

延世大学統一研究院長

文 正仁

黒柳

最初にお願いいたしますのは、延世大学の文正仁先生でございます。文先生は、先ごろの首脳会談に際して、直接、金大中大統領とともにピョンヤンを訪問なさったいわゆる当事者の一人ということになります。韓国の視点から、この南北首脳会談の意味を分析していただくということでございます。

それでは、文先生、よろしくお願いいたします。

文

私、きょう大東文化大学でこういう形でお話しをさせていただくことを大変に光榮に思っておりますし、欣喜といえずところでもあります。お招きいただきました黒柳先生にも、心から感謝をいたします。

私この六月に、金大中大統領の北朝鮮訪問団の一員として訪問することができました。ということから、皆様にそのピョンヤンでの経験、それからその理解、それからその意味についてお話しをさせていただきまます。

先ほどの黒柳先生のお話にありましたように、朝鮮半島というのは、これまで非常に厳しい軍事的緊張状態にあり

ました。つまり、四五年に南北朝鮮に分かれて以来、軍事的な対立が続いているわけであり、非武装地帯をめぐるまして、北からは百二十万の兵士、それから南からは六十万の兵士が相對峙しているわけであり、こういう状況の中で、この六月に首脳会議が行われたわけであり、朝鮮半島における緊張緩和及び平和を達成することにおいて、非常に大きな意味がこれはあったわけ、特に、これまでの南北朝鮮間の過去の関係の経歴を見ますと、今回の六月の首脳会議は非常に意味がありました。

実は、一九九四年の危機のときには、両南北朝鮮の大統領及び書記長が会談をすることになっていたわけであり、しかしその後、金・日成主席の死ということがありました結果、首脳会議は実際には行われませんでした。そしてその後、長い間、緊張関係が続いていたわけであり、

そして、金大中大統領の政権が一九九八年の二月にできました。その後、金大統領は直ちに北に呼びかけたわけであり、それはなかなか実現を見ませんでした。金大中大統領は、まず、首脳会議をやるのではないかと、それから、特別の使節の交換をしようではないかと、それから、政府間のいろんなレベルでの委員会を行おうではないかという提案をしたわけであり、これはすべて北側から却下されました。

ところが今年の六月になりました、北側から、北の海軍による一種の衝突が事件として起こるところまで、その後の緊張関係が高まりました。そして、そのときには、これではソウルとピョンヤンとの間のいわゆる緊張緩和はあり得ない。たとえ金大中大統領がこのような提案を行っても、あるいは太陽政策というものを行っても、緊張緩和が実際に実現するとはとても思えないという非常に悲観的な観測が広がったわけであり、

こういう状況の緊張感の中で六月の首脳会議が行われたわけであり、南北間の非常に大きなターニングポイントに、この首脳会談がなったわけ、

私は、今回の首脳会議の意義を、六つの点に見ております。まず第一は、朝鮮半島における緊張緩和であります。

今回、金大中大統領は、何と十一時間以上にわたって、実際に金正日氏と顔を合わせて会談を行っております。そして、こうした会談を通じまして、個人として大いに知り合いになる、友だちになる、そして相互に、個人的にも相互を信頼するという関係ができました。この大統領それから金総書記ともに、双国の、二つの国の三軍統合の総司令官でありますので、このような人たちが相互に個人的な関係を持って、信頼関係を持つということになれば、これは当然、二つの国の間の緊張関係を大いに緩和することに大きな貢献をなすはずであります。

つまり、この双指導者の間の個人的な信頼関係ができた後では、軍事衝突は、起こるとしましても、これは意図的に起こるということは今後はあり得なくなつたわけでありまして、もし起こつたとしましても、それは何らかの誤解、あるいは誤謬で起こるといふことしかあり得ません。

それから、首脳会議の第二の私が見るところの意味でありますけれども、それは北朝鮮が、この首脳会議を通してはるかに透明性を高めたということでもあります。これまでは、北の国というのはどうもわからない国だ、そして、完全に国境を閉ざしている。北朝鮮の国民も外国に旅行をすることはできないというような実態があつたわけでありまして、けれども、それが北朝鮮の状況をかいま見ることができるようになり、透明性が高まりました。これまで、金正日氏、あるいは北側の軍事指導者に関して、だれも知るところがなかつたわけでありまして、今回の首脳会議を通じまして、南、韓国としましても、あるいは世界のメディアといたしましても、この人たちを実際に知ることができるようになつたわけでありまして、これが緊張緩和の可能性をはるかに大きくするということになるわけです。今回の首脳会議を通して、北側としては、さらにこれから国を開放する、そして国内の改革をするというこのチャンスといひますか、この機会を大いに持つことになつたわけでありまして。

中には、こうした北朝鮮の変化というのはこれは戦術的なものでしかないし、あるいは単に上に化粧をしただけのことであるというふう論じる向きがあるわけでありすけれども、私といたしましては、そのような変化であるとしても、それがだんだん蓄積されることによって、やがて戦略的な変化になり、構造的な変化に結びつくものだというふうに見ているわけでありす。私、北朝鮮は、もう帰ることのできない一つの橋を渡ってしまったと思っているわけでありす。

それから、四つ目のこの首脳会議の意義でありますけれども、今回の首脳会議を通して南北は、ただ単に合意に達することができるということではなくて、その合意を実際に実行することができる能力を持つということがわかったということがあります。これまで南北両国は、幾つかの共同声明、あるいは協定などを実際に結んでいきます。例えば、一九七二年七月十四日の共同声明がありますし、それから九二年にはいわゆる基本条約というものを結んでいるわけですが、そのどれも、実際にそれが実行されたということはなかったわけです。ところが今回は、金大統領とそれから金正日主席の間の同意事項、これはすべて、一切の遅滞を見ることなく実際に実現されていまして、これは非常に重要なことだと思っております。

それから、五つ目の意義でありますけれども、これは、今回の首脳会議を通して、韓国というものがこの朝鮮半島の統一に関して、非常に重要な役割を果たすプレーヤーとして登場したということでありす。これまで、南北というのは直接的な接触というのはなかったために、アメリカとか日本の仲介者を必要としたわけでありす。今回はそれが全く逆転をしまして、自分で提案をし、そして自ら北側を南に連れてくることに、南がそれに成功したわけでありす。しかも、それどころか、金大中大統領は、日本の森首相、アメリカのクリントン大統領の書簡を自ら携えていくという逆転を演じたわけでありすので、これで、韓国というのが朝鮮半島の統一に向かつての非常に重要なアクター

であるということが示されたわけです。

それから、最後のこの首脳会議の意義ではありますが、それは今回の六月十五日の共同宣言にあります。というわけで、この六月十五日の共同宣言の話をさせていただきます。まず第一に、今回の共同声明では、南北が朝鮮半島の主人であるから、我々は、自主的にこの問題を解決すべきであるということをやっております。

ただ、この際に、自主とかあるいは自主的な解決とかいいましても、その言葉の意味がこれまでとは変わってきております。これまででは、北側が自主的な解決と言ったときには、その中に、例えば在韓米軍の撤退とか、あるいは米韓同盟の解消というものを、その前提としていつも強調していたわけでありましたが、今回は、その前提というものを初めからドロップしてございまして、それを言っておりません。そして、そのかわりに、「協力的かつ自主的に」というふうな言い方でしてございまして、排他的に、つまりアメリカを除いて自主で解決をしようというのではなくて、それに触れずに、協力的に解決しようと言っているわけでありまして。

それから、二つ目の六・一五共同宣言の意味でありますけれども、それは、再統一の方式に関して変化があらわれたということでありました。これまででは、南側が少しずつ前進的に統一に進めよう、それに対して北側は、一気に連邦制をうたっていたわけでありましたが、今回は、北朝鮮がその主張を取り下げまして、もう少し韓国に歩み寄った、少しずつ積み上げていく方式に対して理解を示しましたし、最終的に、それを通しての連邦制ということに北側の態度が和らいだわけでありまして。

これまでの再統一の方式につきましては、これは北朝鮮側は、あくまで連邦制の構想を持ってございまして、その中心は一民族統一国家、それから、二つの地方政府と二つのシステムということをやっていたわけでありまして。それに對しまして韓国では、連合制というものを主張してございまして、これは一民族二国家、統一国家ではなくて二国家、そ

れに二つの政府、二つの地方政府ではなくて二つの政府、そして、二つのシステムということを主張していたわけでありませぬ。今回、初めて北側は、南の主張を、最終的には北の連邦制にいく一つの過程として、一つのプロセスとして認めたということがあるわけです。

それから、六・一五共同声明の三つ目の重要な点であります。それは離散家族の再会をうたったことと、それから、韓国における非転向長期囚、つまり、転向しない北からのスパイの釈放をうたったこととあります。既に皆さんご存じのとおり、この八月には二百家族がソウル及びピョンヤンで再会を果たしましたし、十一月の終わりにも、同じように再び離散家族の再会を行えることになっております。

それから、第四の共同宣言の重要な点でありますけれども、それは、いろいろな分野における南北間の交流を盛んにしようということをやっていることとあります。

それから、第五点といたしまして、南北当局者による公式の対話を再開をしようとうたっております。

それから、最後に、金正日主席が、韓国に対して返礼の訪問をするということを明記していることがあります。初めは、実は金正日書記官、これを書面で韓国訪問を明記することを拒否しておりました。これは、金正日氏いわく、私は北朝鮮の軍事委員会の委員長である。そういう立場の者が南を訪問すれば、北の国民にこれは嫌われてしまうということをや金大統領に言っております。

ところが、これに對しまして金大統領は金正日氏に、実際には叱りつけたというような感じで、こういうふうに言ったわけでありませぬ。今回、私が北にきた。しかも、私の方があなたより二十歳も年上である。しかもあなたは、いわゆる東洋の美德というものを尊重すると言っているけれども、ここまで私がやってきたのに對するあなたの東洋の美德の返礼は、一体どうなっているんだと、叱りつけたような感じの発言をしたわけでありませぬ。

次に、少しはしよりますけれども、どうして今回の首脳会議がこれほどに成功を収めたかということで、五つの理由を私としては出してみたいと思っております。一つはこういうことです。まず、今年の二月に、東京テレビが金大中大統領にインタビュをしたときに、金正日氏のことをどう思うかという質問をしたことがあります。そうしたところ、金大中大統領は、いや、金正日氏というのは非常にラショナルで能力のある男だと思っている。さもないければ、どうしてもその政権について以来、あのような国の運営ができるかというふうに言ったわけです。このインタビュの後、北側からの南に対する態度が非常に積極的なものになりました。このように、双方の指導者が、お互い同士を認め合ったことが大きかったと思います。

二つ目は、北側の経済的ないわばプラグマティズムであります。それまで北側は多くの、今でもそうですが、経済的な困難を抱えておりますが、アメリカ、日本は、それに対してちゃんとした対応をしてくれなかった。そして、援助の手を差し伸べてくれるのは韓国だけだったという状況であった中で、この経済問題の解決のために、大きく北側が踏み出したということがあるかと思えます。

それから、三つ目といたしましては、北としては、もともと南との接触は計画、予定をしていたということがありまして、しかも、やがてはいつかは国を外に向けて開放しようということは、実は九〇年代の初めから考えていたことであつたと私は見ております。ところが、その後、核兵器の開発問題とか、あるいはミサイル打ち上げ問題が出てきてしまった結果、これがうまく実現をしなかったのが、今回になつて、いわば初めの予定どおりにこれを行うことができたとということがあります。

それから、第四の成功の理由、これは金大中大統領のいわゆる太陽政策であります。それまでは、南は北に対して、どちらかといえばハードラインの政策をとっていた政権が続いたわけでありすけれども、金大中大統領になりまして、

北側の要求を一部受け入れて、太陽政策というものを行ったということが大きかったと思っております。

それから、最後は、両金首脳の、いわばリーダーとしての補完性であります。金正日氏は、どちらかといえばカリスマ的で、そして、非常に大胆な政策を打ち出すような人物であります。逆に、金大中大統領の方は、どちらかといえば慎重で、しかも長年にわたって大統領の職に就こうという政治経験を持った人でありましたので、この二者間の人格からいえば、相互に補完関係にあったということが言えるのではないかと。それが五番目の理由として、私は挙げられるのではないかと思っております。

最後に、結論であります。時間がありませんので急ぎますけれども、今回の首脳会議は、私は、これだけで実際に平和が達成される、あるいは安定が達成されるということではないと思っております。それは、今後の長い平和安定へ向かつてのプロセスの第一歩を踏み出しただけであるというふうに見ております。

どうしてこのような、そんなに楽観的にはなれないかということ、これからの制約要因、あるいは障害というものを五つ申し上げたいと思っております。

まず第一に、韓国における保守主義者たちが、今回の緊張緩和の動きに関して批判を非常に強めてきているということがあります。それが第一です。

それから、第二に、北側からの、金大中大統領に対する一種の、相互に応じるという幾つかのオファーがないということから、金大中大統領の政策のいわば信憑性といえますか、それに対する韓国軍の信頼というのが薄められてしまっているということがあります。

それから、三つ目の問題点、あるいは制約要因といたしまして、南の経済の問題があります。結局、平和安定、そして最終的には再統一を遂げるということになれば、南が北を経済的に援助せざるを得ないわけでありますけれども、

そのような援助は、韓国の現在の経済状態の下では困難であるということがあるかと思いません。

さらに、非常に重要な問題といたしまして、このように南北間の緊張関係が急に進みますと、ワシントンとソウルとの間の同盟関係がどうなるかということがやがては必ず問題になってきまして、その三者の間というのを調整する必要があるということが、四つ目の制約要因として登場する可能性があると思っております。

それから、第五に、北側のそれは政治の安定度、あるいは北朝鮮の政治の不確実性の問題であります。ときどき言われることでありますけれども、今回、金正日氏は、いわば光と同じ速度で事態を動かしている。それに対して、北朝鮮のテクノクラート、あるいは党の幹部たちは、まるでカタツムリの速さでしか動いていないというふうに言われることがあります。そして、その光の速さとカタツムリの速さとの間の差がどんどんこれから開いてくるとすれば、これは必ず北朝鮮の政治体制自体の不安定度につながるわけにありますので、それが第五の大きな障害になるのではないかと私は見ております。

しかし私は、こうした問題点、あるいは制約要因にもかかわらず、朝鮮半島の将来に関しては楽観的であります。その理由を三つ申し上げたいと思っております。

まず第一に、この南北双方の指導者たちが、再統一の期待を双方で下げることに成功している。双方で下げることに同意したということがあります。つまり、これまででは、双方が必ず法的にも統一を遂げるんだということを言い張っていたわけですが、今回は、事実上の統一をまず始めようではないかということで、期待感を双方に現実のところまで下げているということが挙げられます。

それから、二つ目に、双方の国民はすべて、朝鮮半島における平和統一、それから安定というものを望んでいるわけでありまして、政治家が多少そこで政治的な動きをしようと、国民全体がこれを望んでいる限りその方向は変わら

ないと思っております。

それから、三つ目であります。これは国外の状況です。アメリカも中国もロシアも、多少の違いはあるにしろ、基本的には朝鮮半島における緊張緩和というものを支持しておりますので、これも大きな楽観的に見ることのできる要因であると思っております。この結果、朝鮮半島は、これまでになく安全度が高まった半島になっているわけでありまして、こうしたところから見れば、朝鮮半島の将来というのは、これは楽観視できると思っております。

ご清聴ありがとうございました。近藤先生、ありがとうございました。（拍手）

黒柳

文正仁先生、どうもありがとうございました。

大変明確で、非常に勇気づけられるお話であったというふうに考えますが、このような明白なプレゼンテーションに対して、近藤先生がまことに的確な通訳をしていただいたことも大きくあずかっているというふうに思っております。只今、通訳をしてくださいましたのは、本学の経済学部の教授で、国際交流センターの所長をしておられる近藤正臣先生、もう一方は、日本語を英語にする方の通訳をしていただいております。近藤先生のもとで、本学の大学院を修了された渡部さんです。併せてご紹介をさせていただきます。